

教員の e ラーニング実施における初動と継続を支援する 動機づけ支援方策の提案

Proposal of a motivational and volitional strategy to assist faculty to utilize e-learning

中畠 康二*1*2・中野裕司*1・渡邊あや*1・鈴木克明*1

Koji Nakajima*1*2, Hiroshi Nakano*1, Aya Watanabe*1, Katsuaki Suzuki*1

熊本大学大学院教授システム学専攻*1, 大阪学院大学*2

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University*1, Osaka Gakuin University*2

くあらまし> 大学において、教育の質向上に資する取り組みとして e ラーニングの有効活用が挙げられるが、大学が機関として教員個々の e ラーニング実践を支援することは不可欠といえる。この支援を的確に実施するために提案された、機関による教員動機づけのための ARCS+AT モデルとの連関で、教員が e ラーニング実践を完了するまでの継続的な意志を支援することを目的とした Volition チェックリストを提案する。これにより、機関の e ラーニング支援者と教員は、e ラーニング実践実現までに予想される障壁を活動前計画の段階で予めチェックし、これ乗り越えるための対処法を備えておくことができるようになる。

<キーワード> インストラクショナルデザイン, e ラーニング, 動機づけ, ARCS モデル, ARCS+AT モデル

1. はじめに

インストラクショナルデザイン (ID) の代表的モデルのひとつに、学習者の学習意欲動機づけを高めるための方策を提案する ARCS モデル (Attention-Relevance-Confidence-Satisfaction) がある (鈴木 1995)。Nakajima et al (2011) では、大学等の機関における様々な形態の e ラーニング導入・実践の文脈において、教員に「学習者」としての要素を見出すことにより、ARCS モデルを当てはめられると考え、機関の「支援」を表す AT (Assistance and Tools) という要素を新たに加えて、ARCS+AT モデルを提案している (図 1)。

本研究では、ARCS+AT モデルの守備範囲が初動のみならず Volition (継続する意志) まで含むことを明らかにする研究の一環として、教員の e ラーニング実践を継続的に支援するための Volition チェックリストを提案するものである。

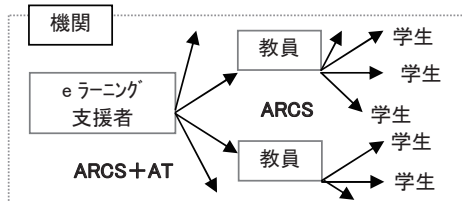


図 1. ARCS+AT モデルの位置づけ

2. ARCS+AT モデル

ARCS+AT モデルに基づいて作成された ARCS+AT チェックリストは、機関の e ラーニング支援スタッフが的確な支援と実践を行うための、A・R・C・S・AT の各要素に関する支援運用や環境の整備・改善を進めるための確認の機会 (表 1) と、ヒントや具体方策を提供する。これにより、機関は可能な範囲での環境改善が実施でき、教員個々が不安を抱えることなく e ラーニング実践に歩を進められるようになる。

表 1. ARCS+AT チェックリストの主なチェック内容

A	機関が教員に対して、e ラーニングに関する情報配信手段の整備ができているか? など
R	各学問領域での ICT 活用の有効性を示し、「自分と関連がありそう」と感じさせる情報配信ができているか? など
AT	当該機関が提供できる支援内容の整理、整備、明示ができているか? など
C	e ラーニング導入実現のための手順や確認事項などを明示できているか? など
S	導入後の実践者の評価・コメントやその後の改善手順の明示などができているか? など

3. 動機づけ支援の対象

Keller (2008) によれば、学習者は初動の動機づけを得たあとも、学習目標を達成するまでに起

こる様々な障壁を乗り越えていくための自律的方略が求められる。ただし、この「意志」が十分強くない場合は、何らかの支援を行い、自己活動制御を促していく必要があるとしている。教員の e ラーニング実践においても同様に考えられ、機関が実施環境を整備したとしても、e ラーニング実践の過程において、個別固有の障壁が現れ、e ラーニングの実施継続が難しくなるケースが考えられる。そこで、想定される障壁を予め教員とともに確認し、対処法を準備して提示することができれば、教員は実施への「自信」が高められ、活動前計画の初動動機づけ支援となる。同時に、その過程で支援すべきポイントと対処法を予め把握している e ラーニング支援者によって、タイムリーな支援を得られることにより、「意志」の継続が支援され、途中で断念することなく、e ラーニング実施の目標が達せられることになる。

4. Volition チェックリストの提案

Volition チェックリストでは、e ラーニング実践の過程を ID プロセスモデルの一般形である ADDIE モデルに倣った区分に分けて、それぞれの区分で障壁となりそうな事項を挙げ（表 2）、それに対する対処法を提示する。e ラーニング支援者は、e ラーニング実施の最初期段階で、教員とともに、本チェックリストを利用して各項目をチェックし、想像される先々の障壁を確認する。

障壁に対する対処法については、AT 要素で機関が整備した支援体制で賄うことになる。最も重要となるのは、e ラーニング支援者による ID に関わる知見の活用である。例えば、鈴木（2002）に示されるような教材設計の手法などを準備し

ておく必要があるだろう。

5. まとめと今後の展望

本研究では、教員の e ラーニング実践達成を機関が継続して的確に支援するための Volition チェックリストを提案した。今後は、このチェックリストを実際に機関の e ラーニング支援者に試用と評価を依頼するなどしてその有効性を計ると同時に、チェック項目を評価・改善し、実用に耐えるものにする必要がある。また、各機関の e ラーニング支援者が求められることになる ID や e ラーニング開発に係るスキルを高めるための効果的方略の検討や e ラーニング支援者間のコミュニティ形成などについての検討を行いたい。

参考文献

- 鈴木克明（1995）「魅力ある教材」設計・開発の枠組みについて—ARCS 動機づけモデルを中心に—, 教育メディア研究, 1(1): 50-61
- 鈴木克明（2002）『教材設計マニュアル』, 北大路書房
- Keller, J. M. (2008) First principles of motivation to learn and e3-learning, *Distance Education*, 29, 2, 175-185
- Nakajima, K., Nakano, H., Ohmori, F., & Suzuki, K. (2011) The Effectiveness of Campus-wide e-Learning Supports Designed by an Extended ARCS Model, *International Journal for Educational Media and Technology*, 5(1): 150-161

表 2. Volition チェックリストの主なチェック内容

区分	主なチェック内容
分析: Analyze	・ 授業の改善課題を e ラーニング活用で解消するのが難しそうか?
設計: Design	・ e ラーニングを活用した授業設計が難しそうか? ・ LMS (Learning Management System) に教材設計をするのが難しそうか?
開発: Develop	・ デジタル教材の開発・制作作業が難しそうか? ・ LMS への設定が難しそうか? ・ 学習方法手順などの関連資料の作成が難しそうか?
実施: Implement	・ 受講生への学習方法周知が難しそうか? ・ 受講生の進度にばらつきがある場合の対応が難しそうか?
評価: Evaluate	・ 受講生用の評価シート等の準備が難しそうか? ・ 受講生に授業を評価させるのに抵抗があるか? ・ e ラーニング利用授業の自己評価を行うことに抵抗があるか?